

# 昨日読んだ文庫

花山多佳子

んなにマイナーだったのかと驚く。また人一倍、語学や西洋文学に通じた教養派だったことも意外の感があった。

他の学生と比べて貧しかった菊池は、卒業してからとにかく金のある娘と結婚しようと考え、「一番条件のよい現在の妻を選んだ」と「半自叙

みとばしていたようで、この機会に突き合わせてみた。

この時代の学生たちが文筆家として名を馳せる速さとそののちの行きづまりは痛ましい。第一次大戦後の昭和の大衆文化・出版時代が押し寄せていたのだ。芥川龍之介や宇野浩二らがしだいに神経を病んでいくさまが広津の「あの時代」に生々しい。そんな中で菊池寛だけは凶たく成功していく。その時代ゆえに。



伝」にある。身も蓋もないドライな書きっぷりが面白い。菊池がいわゆる文学青年ら

しからぬ珍しいタイプであったことは広津和郎の『新編 時代の作家たち』(岩波文庫)の「菊池寛」にも躍如としている。この文庫は以前に読んだのだが、菊池寛のところは読

「今までの作家たちが狭い文壇内でかち得たとは比較にならないほどの拮据がりを持った社会的の名声を獲得して行った。それは政治家や実業家が持つような名声であった。自分で自分を嘖かすような余計なものを持っていない彼の健康な常識は、何処にでも通用したのである」と広津は書いている。疑問も含みつゝなるほど、とおもつ。現代の始まりだなあと。(歌人)

最近たまたま菊池寛の『平自叙伝・無名作家の日記』(岩波文庫)を読んだ。関心があつたわけではないのだが面白かつた。菊池寛といえは芥川龍之介の純文学に対して大衆流行作家、『文藝春秋』を創刊した文壇の大ボスで知られる。中学生の頃だったか『藤十郎の恋』(新潮文庫)など短篇から長篇『真珠夫人』(文春文庫)までストーリーの面白さにつられてかなり読んだ。でも読んだとは特に人には言わない、そんな作家だ。

この「無名作家の日記」が菊池寛の出世作だったとは知らなかった。京大在学中に東京の友人が頭角をあらわしていく中で、出遅れたままの焦燥と失意の日々があけすけに語られる。あの流行作家がこ